

ラストソング

園長 高嶋 邦幸

3月3日(月)の「ひなまつり」では、学年末ということもあって、お子様たちの成長ぶりをはっきりとした手紙としてお感じになられたと思うのですが、いかがでしたか。とにかくとても楽しい会でした。春の爽やかな風のような、温もりと心地よさを感じさせる会でした。

さて、春を告げる花の代表格といえば、梅や水仙が挙げられるのだそうですが、幼稚園でいえば昨年の今頃にご紹介した「ツルニチニチソウ」(洋名:ピンカ・マジョール)が身近な春告げ草になるでしょうか。玄関下階段横の一带に、今いくつか咲いている薄紫の花です。和名のとおりツルが地をはって、時折侵入した下のお子さんの足を取ったりしています。元々は地中海が原産だそうです、その割には寒さに強く、今年など、3度目の降雪のさ中に第一号が花開いています。新園舎竣工とともに植えられた、幼稚園では新参の花です。昨年初めて咲いて「園長だより」で次のように紹介しました。

「卒園の時期が来たことを告げる、そんな成城幼稚園の新しい風物詩になるのではないのでしょうか。花言葉は、楽しい思い出、優しい追憶、幼馴染み、朋友、だそうです。」これから次々と咲いていくと思います。花が増えるにつれ卒園が近づき、あたり一面咲きそろうのは新年度のはじまり、入園式のころでしょうか。

年長さんにとっては、まさしくカウントダウンの日々、それも様々な思いのこもった毎日になっているのではないのでしょうか。アメリカンスクールの3名の先生方の参観(お一人はニュージーランドの方、お二人は日本人)、おひなまつり、学園中学校高等学校のお二人の先生(青柳先生・作本先生)の訪問授業、そしてお別れ遠足、と年長さんは興奮の日々を過ごしています。思う存分楽しんでほしいと思っています。

イタリアの売出し中のテナーが来日して演奏会があるのだけれど、チケットが売れていないので安くするから聴きにきてくれ、と動員されて新宿の厚生年金会館へ行ったのは、私がまだ声楽専攻の音大生だった時です。当時ドイツ歌曲に入れ込んでいた私は、何だオペラか、テナーか、とあまり乗り気でなかったことを憶えています。

私にとってまったく無名のそのテナー、スラリとした2枚目ではなく、ひげ面の田舎くさいアンコ型相撲取りのような大きなオジサンでした。まったく身体に合っていない燕尾服、風呂敷くらいの巨大な白いハンカチを手に登場する姿は、かなりユーモラスでした。ピアノ一本の伴奏でオペラのアリアを歌ったと思うのですが、一曲歌い終わるたびに袖に引っ込んでしまうことや風呂敷風ハンカチで顔をくるくる拭く仕草などが思い出されるばかりで、どんな歌いっぷりだったかちっとも思い出せません。ただ、会場はブラボーで大いに沸いて割引で3千円程度にしてもらったチケット代がとても安く感じられたことは確かです。

そのテナー「ルチアーノ・パヴァロッチィ」は、20世紀末、3大テナーの一人とし

て一般的な知名度が高まりましたが、勿論その道では早くから知られており、プッチーニ、ヴェルディをはじめイタリアオペラの代表的なテナーでした。私自身はバス・バリトンという低い声種ですので、実を言えばそれほど熱心な聴き手というわけではありませんでした。例外は、大好きなオペラということでプッチーニ作曲『ボエーム』の、パヴァロッティのロドルフォ、幼稚園の同級だったというミレルラ・フレエニのミミの2重唱をよく聴きました。パヴァロッティについて「幼稚園のころ、パヴァロッティがよく私のミルクをとって飲んでいたので、見ての通り体格に差ができたのよ。」と小柄なフレエニはユーモアたっぷりに語っています。

最近では、トリノオリンピック開会式での「誰も寝てはならぬ」(プッチーニ作曲歌劇『トゥーランドット』)の歌唱は世界に響きわたりました。それがパヴァロッティにとって最後の公式の場での演奏だったようです。「誰も寝てはならぬ」は荒川静香さんが金メダルを取った演技の曲であることはよく知られています。昨年9月71歳で亡くなりましたが、後にも先にも、私が生で聴いたのは厚生年金会館のそれのみで、今となってはなんと貴重な経験だったのだらうと思います。その時聴く耳を十分持っていなかったことが悔やまれます。幸いたくさんの録音が残され、今でも歌声を聴くことができます。だからこそ遅まきながらパヴァロッティの魅力を「発見」できたのですが、新たな録音を聴くことはもちろんもうできません。

私が今一番気に入っているのはオペラのアリアではなくカンツォーネの「カルーソー」という曲です。カルーソーは実在の名テナーで彼の老境の心情を切々と歌い上げる名曲です。イル・ディーヴォというグループも歌っていますのでご存知の方もいらっしゃると思います。前々から聞き知っていたはずなのですが、琴線に響いたのは割りと最近のことです。パヴァロッティの魅力はたくさんありますが、先ずは、とても気持ちのよい美声であること、特に高音のツヤは稀代のものです。ですから、精進・努力、刻苦・迷いなど実は多々あったのかもしれませんが、いとも軽々とした肩の力が抜けた歌を聴かせてもらえるのです。ドミンゴやカレーラスにはない魅力です。かつてはその軽さが物足りなかったのですから、面白いものです。

このごろ、こんなふうに様々な面で今まで見過ごしてきた良さや価値を「発見」する機会が多く、うれしい驚きの中にいます。逆にいえば、この20年間ほど何を見たり聴いたりして暮らしてきたのか、と思うほど心が動かない日々が続いていたような気がします。ある時までの蓄積を切り崩しながら、新たな発見や感動も少なくてただただ多忙に追われていたのでしょう。そんな枯れた私に再び「発見」の日が到来したのは、すべてにわたって新鮮な経験の真っ只中にある幼稚園の子どもたちと接しているからではないか、とにらんでいます。よく「くもりのない目」といいますが、子どもたちの、先入観を持たず真正面からひたむきに見つめる視線にはハッとさせられます。おかげで私まで以前よりは素直にものを見られるようになったのでは、と思うのです。

成城幼稚園の子どもたちの歌声には、いつも感心させられます。特に年長さんの生気のコもったひたむきな歌いっぷりには、何度背筋が震えたことか。生命力そのものが歌となっているように感じます。もう少し聴いていたい、観ていたいけれど、お別れですね。卒園式の年長さんの歌をじっくりと聴きたいと思っています。